

ホームページ <http://www.cpi-mate.gr.jp> URL English <http://cpimate.com>

1999年総会で決めた「2020年までの目標」の期限まであと4年

実を結ばせたい活動、その1



この写真は、昨年3月20日から22日、C.P.I.が設立に関与した、西ジャワ州チアンジュールの薬剤師養成高校の校舎を使っての、奨学生修了者・各地代表者会議の様子です。

そのとき、3つの提起がありました。

ひとつ；奨学生修了者の連絡グループをインターネットの「What's APP」に置き、修了者すべての登録を目指す。アイデアの実現をネットワークで図る。

ふたつ；各地の修了者の集まりで、修了者による教育里子支援を開始する。とりあえず、いま集まっている者たちにより、各地2名ずつ16名の教育里子を支援する。

みつつ；C.P.I.の教育開発活動に対する支援を勤務する企業のCSR(社会責任活動)に働きかける、あるいは所属する政府機関としての協力を行おうとの提案が、採択されました。

あれから一年半で分かってきた課題

ふたつ目、みつつ目の提案は、C.P.I.の事業担当者が、直接のつながりをもっている奨学生修了者との話合いのなかで可能になっているのが現実です。4700名の奨学生修了者の中に、よい仕事をしている人々が大勢いることも分かっていますから、その彼らとネット経由でも意見交換できれば、可能性は、より広がるのではないかと思います。

車のディーラー、大会社の管理職、外国企業のインドネシア支社長、政府の中堅管理職、等々、奨学生修了者の消息を、いろいろ聞き及びます。

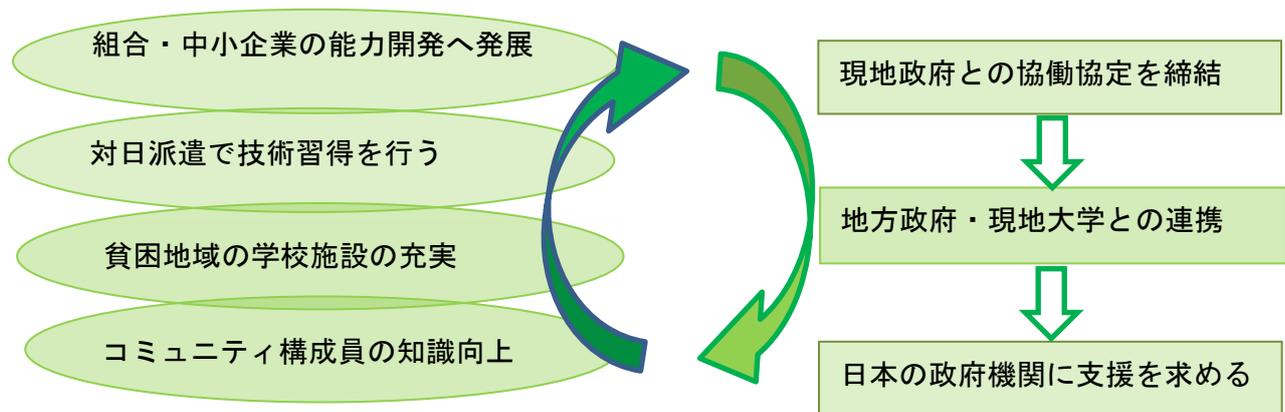
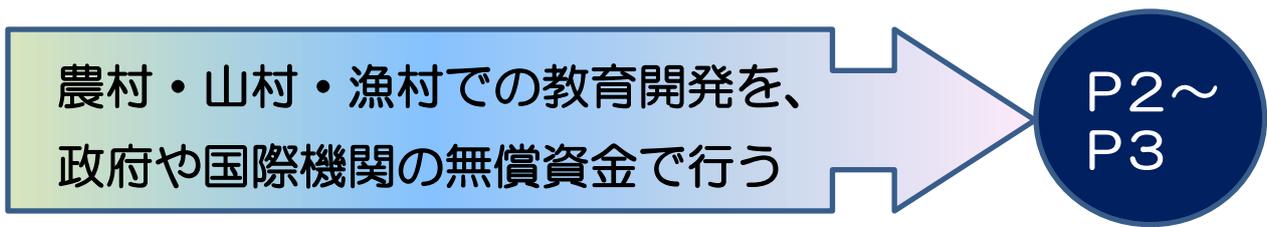
その人々に具体的な提案を伝え、連携していけば、その力は結構すごいものがあると考えます。

ですから、奨学生修了者の「What's APP」への登録者を増やすことが必要となりますが、これがなかなか進みません。発足したばかりの修了者組織に、まだ、統率する力が備わっていないと分かりました。

C.P.I.のリーダーシップを依頼されました

2016年11月の段階で、修了者組織の幹部たちから、C.P.I.のリーダーシップがほしいとの連絡があり、各地の教育里子をとりまとめているローカルリーダーに、修了者を含めて把握している全員からの、「What's APP」登録に必要なデータ収集を、依頼しました。今年度中には登録者を劇的に増やします。

実を結ばせたい活動、その2



教育開発のアイデアの生れるまで

たとえば、あなたはインドネシアの素敵な島に行きます。魚を獲る仕方、干し魚をつくっている様子を見ると、とても市場によい値段でだすのは難しいだろうなと思ってしまふ、とします。小学校の男の子たちと話をすると、「ここにいても家族の暮らしをよくできるとは思えないよ。テレビでみると、この村よりいい暮らしがあるじゃないか。小学校を出たら、村から出るんだ」と口をそろえて言います。実際に、最近になって、中学には女の子しかいません。

一緒にいた地元政府の職員も、このままでは、インドネシアの漁業はダメになってしまう、と嘆いています。

さて、ある日、別件で、海洋漁業省のスタッフに会います。「今年から、漁業省は、可能性の高い漁業組合を直接支援して人材育成を図れるようになったのですよ。問題は、どの漁業組合の可能性が高いかの見極めが簡単ではないことです」と言います。

ここで、訪れた漁村で、地方政府と地域住民から要望された話を思い出します。

「日本の、市場にいい魚をだせる漁業を、できれば日本で実践訓練を学びたい、漁村のみんな知識向上も図りたい、そのためには拠点としての教育施設がポロポロで朽ち果てそうだから何とかならないか……。」わかりやすい要望です。そのように改善される漁村の漁業組合なら、海洋漁業省の求める組合になりそうです。そのためには、ぐずぐずと年を重ねてはいられない。複合的な教育開発が必要になるわけです。地元の政府と住民の要望と、海洋漁業省の想いが、自分の頭の中で、スパークします。

アイデアの推進力は、皆さんの励ましです

C. P. I. の自己資金は調査費程度しかない、現地政府の予算もいまの段階では限界がみえている。ですが、人材は、信頼を培ってきた地方政府や現地大学と連携して投入できる。中央政府からの便宜供与や他省庁協力も取りつけられそう。ならば、それらを日本政府に示して無償支援を求められないか！

ここまでくると、知恵と励ましが何よりの推進力です。

もう一度、東インドネシアでの漁業教育開発の緊急性を訴えたい

インドネシアでは、排他的漁業水域 (FEZ と呼称する) での漁業を、外国企業はできないことになっています。ところが、昨年、ASFI というマグロ缶詰の会社が、インドネシアで買い取った漁業会社の名義で、2016 年に FEZ で 30,000 トンものマグロ水揚げができる漁業権を取得したとのことです。

日本の漁業関係者は大変に危惧しています。30,000 トンともなると、まだ成育途上にあるマグロも獲ることになる恐れがあるからです。

根本的な課題は、こうです。缶詰ですから、獲ったマグロの形にさほどの要求はされず、総重量で出来高収入となったら、いまのインドネシアの漁民

なら、「NO！」を發せず乱獲に進むでしょう。

それが、結局は彼らの将来の危うくするとの知識が、徹底されていないなら、極めて当然と思われれます。

ここに、教育開発の要点があります。

つまり、できるかぎり魚に傷をつけずに獲り、獲った魚を新鮮な状態でマーケットに搬入するプロセス、搬入から販売までの鮮度を守るプロセス、利益の分配の仕方、漁具や漁船の買入れや修理など、漁獲の質に係る能力を身につけていなければ、困るのです。

世界中の漁場から美味しい魚を仕入れたい日本人としては、他国のことと思わず、積極的に取組んでよい課題ではないでしょうか。

教育は、課題を解決する道を示すことができる。でも、その道は険しい。

C. P. I. は、知識移転を目標にしたコミュニティカレッジを、地元大学に協力して建設させ、2015 年 7 月に男子を含む生徒数 160 名を超えて成果を出しました。



日本大使館の無償資金の導入を地元 NGO に紹介し実現をみた、持続的資源管理型漁業を中学生の段階で教える初めての試みです。周辺の島の



学生は、コミュニティ舟で通学します。

彼らは必ず、自分たちの生活を、180 度変える技術を学びたいと望むようになるでしょう。

なぜなら、彼らが学ぶテキストに『持続的資源管理型の漁業こそが、漁村の生活を向上させる道である』と書いてあるからです。彼らはその道の実現に挑むとき、実践訓練を行う道を切り開いておく必要があると考えます。

日本の伝統的一本釣り漁には、資源管理型漁業の精神が息づいている。日本の漁師だけが、その漁の技術と精神を教えることができる。



この二枚の写真は yahoo の「一本釣り image 集」から拝借しました

世界的に、日本のマグロ漁獲量を制限しようとする動きがありますが、残念で悔しいことです。実は日本こそが、持続的資源管理型漁業の精神が伝統的に息

づいているからです。このことを世界中に知らせるためにも、マグロの一本釣り漁を、諸外国の漁師に教え、同じ精神をもつ仲間を増やすことが肝心です。

左の絵は、パヤオと一本釣りの組み合わせです。沖縄の漁協が進めている漁です。これも、乗組員全員が、一本釣りの基本技術と心構えがあつて、できることです。

そのことを解るには、日本で、日本の漁師たちの乗る漁船の上で訓練を行うことが、最もよいと思われれます。C.P.I. は、JICA に対して技術協力事業を提案中です。

実を結ばせたい活動、その3

教育支援・教育開発を効果的にするためには、様々なアプローチが大切

P4~
P7



教育支援の地域
ボランティアとの
連携を図る



コミュニティ への教育開発を
行うために、技術や人材のある
現地の大学と連携する



教育里子への
奨学事業を日本
の教育里親の支
援金によって行う

C.P.I.への協力者を増やす催事を行う



日本国内に招聘して、
日本の技術を伝える。
これは立派な国際協
力です。

この図面は、三回目の登場です。お馴染みになって戴けたのではないかと思います。

C.P.I.が国際交流を始めて2020年には40年になります。1988年に国際協力に踏み切ったからの年数を数えても、30年になります。

C.P.I.の国際協力は、教育里親による、顔も名前も家庭状況もわかる子どもを受け持っていただくという、草の根支援の原点のような活動から始めました。

ですから、教育支援の各地で、人々への能力開発（私たちは、敢えて教育開発と呼んでいます）を始めましたときも、受益者にとことん寄り添うのを特徴にしました。この姿勢は、世界銀行の2000年以降の新しい方針と合致し、日本では数少ない、世界銀行から

資格を得た、住民参加型開発で連携できるNGOとして、活動ができました。(2004年から2008年)

国際協力は、参画者ひとり一人が、「自分の信頼を築く礎となると判断するなら、一切の出し惜しみをしない」ことが、大切です。短期的な自分の損得を考えると成り立ちません。このことは最も大事なことです。

C.P.I.の私たちは、いまの貧しさを乗り越えて向上しようとする人々に寄り添い、様々なアプローチを通して、本気になって国際協力を手を貸そうとする方々と、手を携える活動を続けてきました。そのうちのひとつ、インドネシアでの国際協力を進めるC. P. I. への協力者を増やそうと始めた「日本インドネシア市民友好フェスティバル」も、ようやく成果が実を結び始めました。2016年の様子を、以下に報告します。



C.P.I. Japan

The Committee for Promotion to Innovate Japanese
People by Educational and Cultural Contact, since 1979

Head Quarter; 2-16-9 NAKAHARA MITAKA, TOKYO 1810005 JAPAN

Office in Jakarta Indonesia; Gedung SME Tower 10F, Jl. Jend Gatoto Subroto, Jakarta 12780

E-mail: cpimate@gmail.com URL <http://cpimate.com>

平成 28 年 12 月 10 日

“日本-インドネシア市民友好フェスティバル 2016 in YOYOGI” 報告書

認定 NPO 法人 C.P.I.教育文化交流推進委員会

〒1810005 東京都三鷹市中原 2-16-9

会長 小西菊文

1. 事業名：日本-インドネシア市民友好フェスティバル 2016 in YOYOGI
2. 実施日：2016 年 10 月 15-16 日
3. 場 所：東京都管轄 代々木公園イベント広場内並木通り約 5,000 m²
4. 組織者：認定 NPO 法人 C.P.I.教育文化交流推進委員会（共催：インドネシア中央政府）
後援者：外務省南東アジア 2 課、東京都政策企画局
事務局：事務局長・認定 NPO 法人 C.P.I.教育文化交流推進委員会 小西菊文
会場担当・カドマン企画 大塚 隆
5. 協賛者：インドネシア西パプア州政府、(財)AEON 1%クラブ、サントリーホールディングス株式会社、
クリダ ヌサンタラ基金会、レストラン出店会社 15 社、物販/サービス会社 11 社
(なお、来日グループの経費はすべて相手様負担であり、実質的に、多大なご協賛です)
6. 実施状況概要：

このフェスティバルの目的は、インドネシア政府に於いても正式文書で 2014-2017 年計画に明記のあるとおり、日本人とインドネシア人の友好を築いている、若しくは築きたい人々が、両国民の将来の良き展望をもてるよう、国際協力を推進するために結集を図ることにある。本年は、元・副大統領 Try Strisno 氏を迎えて、10 月 15 日午前 10 時に開会を行って戴いた。

パプア州政府派遣による舞踏団は、勇壮な舞踏を披露し、且つ別立てでパプア州の説明を 50 インチモニターを使って多くの聴衆に対して行い、初来日の務めを果たした。インドネシア高校の正規科目として各地伝統舞踊を習得させているクリダ・ヌサンタラ基金会からの出演者（選抜 34 名の高校生を含む）は、インドネシア各地の衣装を紹介しつつ舞踊を行った。

日本の聴衆とくに若者たちが、伝統舞踊家を高校生段階から育てる目的で設立されているそのような高校のあるインドネシアを知り、強い興味を示していたのが印象的であった。

ステージでは、ほかに、日本でインドネシア舞踊を披露している 8 グループ、プロ女性歌手が出演され、充実したインドネシア文化の紹介を実現できた。来場者 10 万人の実現により、直接に資金提供いただいた協賛および出店の各社にとっての目標も果たせたと考える。

7. “日本インドネシア市民友好フェスティバル 2017”に於いては、C.P.I.JAPAN とインドネシア中央政府の協働する社会活動に、来場者が間接的に寄与できる形を実現する。具体的には、代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターの大ホールで開催予定のチャリティコンサートおよび代々木公園フェスティバル会場での賛同者獲得を目指す。

“日本-インドネシア市民友好フェスティバル 2016 in YOYOGI”



C.P.I.JAPAN は、本年から、日本の組合および中小企業の海外活動を実質的に統括している地方自治体との共同開催に踏み切りました。C.P.I.の協定を結んでいる組合&中小企業省から依頼を受けた『両国の組合&中小企業の確実な関係づくり』に向けて第一歩です。



元・副大統領 トゥリ ストゥリスノ氏により、開会が宣言されました。両国の友好に資する二日間にしようとの力強さも暖かい挨拶でした。



来日した クリダ スサンタラ基金会の皆さんは、インドネシア各地の衣装を紹介しながら、竹の楽器アングルンによる合奏を行いました。同基金会は、伝統舞踊を正規科目としている、特別な高校を運営しています。



クリダ スサンタラ基金会で選ばれた34名の高校生たちは、元気いっぱい舞踊を披露しました。彼らは大変に礼儀正しく、事前の研修が役立っていたと思われます。



西パプア州政府から派遣された有名な舞踏団による勇壮な舞い。初めての来日で、その勇壮な舞踏は、日本の人々に、文化を知って国際交流をしたいとの興味を引き起こしていました。



西パプア州政府の説明用テントです。日本の人々は、その特色ある様子にもつばら興味をもち、一緒に写真を撮りたがる人が絶えませんでした。友人知人に写真を見せて自慢して下さることが、交流の第一歩になると言えるでしょう。



多くの聴衆が、日本語で行われた 西パプア州の文化についての説明に聞き入っていました。低いステージ設定は、このようなことには役立ったようで、ダンスのステージとしては少々不満がある様子だった 州知事第一秘書からも、好評でした。



このフェスティバルは、初の西パプア州からの来日を実現させ、2020年の東京オリンピックを前にして様々な交流に役立ちました。



今回のステージ設定は、低い舞台、奥行きを長く、前舞台を広げて、前面は左右の低い位置からの広角照明、奥は天井からだけの拡散照明としました。日本の舞踊関係者からは、プロの舞踊家を含めて「観客の反応がピンピン感じられてよかった」と、思った以上の好評で、ありがたいことでした。



レストランのお客様は、10万人の来場者の中、まったく途切れることない行列が続きました。「ケヤキ並木始まって以来の人出」とは関係者の言です。



インドネシア食材卸の出店者は、当初は出店場所を心配していましたが、まったくの杞憂におわり、お客様が途切れることなく、喜んでおられました。



共同開催の秋田県・茨城県の職員の方々には、出店コーナーで売り切れが続出し、予算設定段階での来場者予想の10倍の来場者に驚かれていました。今後のよい弾みとなったと考えます。

実を結ばせたい活動、その4

小学校の飲料水浄化プロジェクトに、 強力な協力者！

応援のチャリティ催事を実現

企業CSRの協賛を求める

協力チームの編成を準備中です



小西会長と意気投合された TULUS 氏

「子どもたちに毒水を飲ますな」のコンセプトで始めた東ジャワ州の小学校での浄水施設設置プロジェクトの継続のために、企業CSR（企業の社会的責任活動資金）に訴えてきました。

しかし、2015年の日立建機株式会社からの資金提供を戴いて以降、なかなか資金が集まらず、一年間の停滞に陥っておりました。

小西会長は、そのことを、高知県のSNS友人徳満さんのおかげで友人となりましたインドネシアの有名歌手 TULUS さんに、率直に相談したところ、それは残念だとの話になりました。

TULUS さんのマネジメント会社との間で、チャリティコンサートでの資金集めのアイデアが実を結び、2017年10月に東京で開催しようということとなりました。本年9月17日の C.P.I.理事会で概略報告の承認を受け、実現に向け動き出しています。

元・副大統領 TRY SUTRISNO 氏と夫人も協力を約束して下さい、大きな動きとなりそうです。

日本内でのWEB制作など協力者を集めているところです。

